おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和７(2025)年
３月号
通巻655号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和７年３月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

滋賀県守山市第１なぎさ公園から琵琶湖対岸の比叡山方面を望む　横田哲矢さん撮影

昭和39年11月23日　月次祭法話より

佐渡の日蓮を訪ねて

法主　矢追日聖（満52歳）

霊界と現界との話し合い

今日はいいお天気でございます。この間から少々睡眠不足しておりまして、ここ2、3日ちょっと頭が重たいんです。ちょっとへたれておることがありまして、これはもう人間ですからやむを得ないですが、今年の11月の新聞（※『大倭新聞』第4号）がどうも遅れまして皆さんに申し訳ない。

編集のほうから日蓮について何か書いて欲しいという話でございました。それで簡単に書けると思っておったんです。ところが書き出しますと、昼間は俗事の用事がございましてほとんど出来ない。そこで夜の1時頃から書斎に入りまして、4時頃まで粘っておるんですが、そんなんでここのところ精進しすぎとるんです。

ちょっと気違いじみた話になるんですけれども、もうみんな寝てしまって、日蓮のことについて書こうと書斎に座っておれば、どうしても霊界におる日蓮と話をする時間が長くなりまして、原稿のほうがさっぱり進まないんです。こういうようなことは皆さんに言うたって分からないことなんですが、霊界の日蓮と現界の私との話し合いですから、実に複雑多岐に渡った話になるんです。それをいかにして簡単な文章にまとめるかということが、重労働のような感じ方になってかなり疲れるんです。

日蓮はもう亡くなって現界にいない人

ですし、あの人は一生として自分のお役目を果たした人で全部済んでおるんですから、話はありすぎる程あるんですね。こっちのほうは、まだこれから先がある。

文章に書く以上は、複雑でややこしい霊界と現界の関係を、少しでも分かりやすく文章化したいという、人間的な私自身の気持ちがあるんですよ。それでこの間から大分やっているんです。どうも明日くらいが締め切りらしいんですけども、まだ半分もいっていない。出来上がりました時には、私と霊界の日蓮とが話し合いをしながら、どれだけ短くまとめ上げて文章にしたかというところが少し見ものだと思っているんです。

書く文章には日蓮の血が通う

私は文学的に素養もありません。自分の霊感によって捉えた、言葉では言い表せないようなものを、日に日に感じる。それをどういうような言葉を使えば、そうした味が分かるだろうかと考えてしまうと、何時間経っても筆が進まないんですよ。考えている時間が多くてね。でも眠くもないしどうもないんですよ。それで目頭が痛いような眠り方をしばらくやっているんです。

新聞が遅れているというのも編集者の責任やなしに、そういう私個人の責任になっています。他の方を先にやってくれと言うんですけども、こちらの原稿を見なければ編集出来ないと言う。編集者の真面目な気持ちですから、それも汲み取りましてやむを得ない。一応皆さんに詫びとかないかんと思うているんです。

どうも今晩、明日くらいには出来そうにもない。けれども、出来たものは日蓮の血が通っていますから、読む人によってはかなり響く面があると思うんです。霊感とか霊動とかいう方面に疎い人は読んでもらわなくったって構わないし、矢追日聖はまた妄想狂みたいなのを書いとるなということで済みます。けれども霊界と現界に通ずるような霊能のある人なんかが読んでもらえば、その中からその時の霊の働き、血の動きというものが魂に必ず響くだろうと思います。

土地と切り離されない気の動き

私の母親がもう78歳の年寄りで目方がちょっとあり過ぎるんで、歩くのに困難があるんです。体の割に足元が弱いですから、歩くのに非常に難儀しています。それで私の母親は、まだ一度も佐渡へ行っていなかったんです。その他は大抵行っておるんですけど、佐渡には一度も行ったことがない。それで死ぬまでにどうしても一度は佐渡へ行きたいと、母親は昔から言っておったんです。足がだいぶ弱くなっているし、外に連れて歩くのは今年を過ぎてはもう無理やと思いまして、今年の春頃から佐渡へ行く話し合いをしとったんです。

天災とか飢饉とか、悪病の流行とか地震とかのいろんな現象というものは、正しき宗教、正しき法というものを人間界に出してくるよい結果で、瑞祥であるということを日蓮はよく言われるんです。災難に遭遇した人はまことに困るんですけれども、そういうようなものが現れると、これは一大瑞祥であると言う。

偶然か必然か知りませんけども、いよいよ佐渡へ行くということで話は決まって、日にちまで大体決まったんですよ。そうしたら新潟で大きな震災がありました。それで汽車も具合が悪いし新潟の町は砕けとるしで、佐渡行きは中止になったんです。

佐渡へ行くという時に地震があるというのも、これも何か意味があると思う。それからしばらく待ちまして、10月16日に、いよいよ佐渡へ参りました。私の母と安宿苑の今井苑長と私の家内と私と、それだけで行ったんです。

日蓮が生きておっていろいろ活躍されたという時の気の働きというものが、その土地と絶対に切り離されないで永久に残っている。だから小湊（※千葉県鴨川市）で会うた時の日蓮と、鎌倉で会うた時の日蓮、龍ノ口（※神奈川県藤沢市）で会うた時の日蓮や、身延（※山梨県南巨摩郡）で会うた日蓮と、同じ日蓮であるんですけども全部違うんですよ。その場所へ行けばそこで生きておられた時の気の動きがある。これは日蓮だけじゃない。我々もそうなんです。霊界はそういうことになっているんですね。これは皆さんに言うたって分からないんですけどもね。

家内も私も佐渡へ一度も行ったことがなかった。母親も切なる願いを昔からもっておった人ですから、子どもとして最後の親孝行になるだろうという気持ちで佐渡まで連れて行ったんですよ。

塚原での悲愴な日蓮

佐渡へ行ったんですけれど、その日は雨が降りましてね。最初に日蓮が佐渡に流された時の塚原というところ、御遺文の三味堂（さんまいどう）ですね。そこへ最初に行ったんです。

小さいお堂があるんですが、最初に流罪にされた建物です。今はその横に供養塔が建っておりまして、玉垣で囲っています。雨が降るとお堂の軒下に入って雨宿りをしたんです。

私も苑長もそうですけれども、記録にもしておきたいと思って8ミリカメラをさげていました。

ちょっと雨が止むと軒下から外に出て、そこらあたりを撮るんですけども、撮りかけると雨が降るんです。霊界と現界の両方を見ていないと分かりにくいんですけど、現界においての雨の降りかたと、霊界における日蓮の気の動きとが一致しているんですよ。

嬉しい時とか悲しい時とかに込み上げてきて涙が出て、それで一時治まってまた込み上げてきて涙が出るというようなことは、皆さんも経験されていると思うんですけれど、霊界を見ているとそんな状態だったんです。雨が降るのと止むのとの間隔が3分もないんですよ。止んだと思ってカメラで撮っていたら、また降るんですね。そこへもってきて風も吹きました。

塚原の日蓮というのは悲愴な日蓮でした。以前に龍ノ口の死刑場で私が会うた日蓮よりも、塚原の三昧堂においての日蓮の心境の方が、実に悲愴なものだったんです。

鎌倉を発って佐渡へ流される時には、法華経が本当であったなら、また鎌倉へも帰ってくるし、また父母の墓にも参るというような、大きなことを言うておったんですよ。これは御遺文を読まれても分かるんですけど、法華経がもし間違いなかったらという前提のもとに言っておられる。釈尊の仰ることがもし嘘でなかったら、日蓮は帰ってくるんだと。これは法華経に頼っての話です。ところが塚原に流された時の心境は、ああ俺もこれで最後か、もうここで自分は死ぬんだという感覚でした。

その後に赦免状がきて、日蓮が受け取られた場所があるんです。これは日朗坂というところです。日朗山本光寺へ行った時も塚原の時と同じように日蓮は泣いておるんですけど、その涙の出方が違って自覚の涙なんですよ。

赦免状がきた時、やっぱり法華経が正しかった、釈尊の仰ることには間違いはなかった。自分は上行菩薩の生まれ変わりであって、日本において正法を流布する、広める人間だったんだという自覚の涙だったんです。安心感やら喜びやら、実に複雑な表情でした。

枯れ松に住まう龍神

お寺の境内に500年か600年か知りませんけども、大きな枯れた松があったんです。その松の根元においてその赦免状を受け取って、そして弟子たちに披露されたという言い伝えがお寺にはありました。

その枯れた松のところに、ものすごい龍神が出よりました。出よりました言うたらおかしいんですけども。これは霊界の話ですけども、やっぱりそういうような場所には大きな龍神がおる。絵に描いているような龍です。じっと睨めっこしとったら角まで出て、体の鱗の端々が金色に光っている。そういう大龍神がやっぱりそういう場所におるんですね。日蓮が島に流される以前から、あの龍神はおったと私は思います。

私の母とか苑長とかみんなはお堂の中に入ったり、お寺の人に案内してもらって宝物を見せてもらったりしておったんですけども、私は別にお堂に拝みにも行かなきゃ宝物殿も入らなかった。

お堂に参りに行くのが本当なんですよ。ちゃんとお堂で祀ってんねんし、住職もおるんですから。ところが行こうという気持ちはあっても行かれないんです。3人が行っとるんですし、お寺の人が案内しとんのに、こっちがカメラを手にぶらぶらしとったら行儀悪い。遊びにきたとしか思われない。

お堂のご本尊に手を合わせて拝むというのが礼儀だと思うんです。ところがその松の木のそばにおったら動きがとられへん。お堂の方に行こうと思っても行かしてくれないんだからしようがない。だから8ミリで撮ったりしておったんですけども、龍神のおった関係で、塚原の時よりも風がひどかったんです。もちろん涙雨のような雨が降っていましたけども、その時の霊界の日蓮は、自分の今世に生まれてきた自覚に対しての喜びの涙でしたから、私も嬉しいような気持ちになりました。

真野（まの）の御陵を訪ねる

次に順徳天皇の御陵の方に車をまわしてくれたんです。その時も自動車の中ではさほど雨は降っていなかった。御陵のあるところは真野というらしいですけども、御陵の前に土産物を売っている店があるんです。そこまで車が行ける。そこから100メートル程行けば御陵ですから、そこで一応降りた。その時もそう大した雨ではなかった。

私の母は足が弱いもんですから、土産物を売っている店に座らしておいて、私ら3人が御陵へお参りしようやないかと話し合いしまして店の外へ出たんです。風は少しあったんですけれど、その時にも雨はそんなに降っていなかった。

先に苑長と私の家内と、自動車に乗っておった女の若いガイドさんの3人が御陵の方へ行きよったんです。母親も土産物屋におるんやから、ここから参とったらいいやろうと私は思っていました。けれどもその参りに行く姿だけは8ミリに入れといたろと思って、後ろから撮っておったんです。ところがえらい風が吹き、そこへもってきて土砂降りのものすごい雨になった。

私は着物に羽織を着ている。着物やから濡れたらあとが困るしと人間根性を出したんですけれど、風と雨と一遍にきよったから、下半身なんか瞬間で濡れてしもうた。ぼたぼたになってしまったんです。こらえらいことになったなと思った。この時でも濡れたらしゃあない、ここからでもお参りしようと人間心がまだあった。そうしたら、それがいけなかったですね。土産物屋の方に帰ろうと思って振り返ろうと思った途端、私は雨の中を御陵の方に引っ張られてしもうたんです。その時は横殴りの雨で着物の裾からぼたぼた落ちよった。

ひどいことになった。せやけどもうしようないですよ。霊界では濡れることなんか問題やないんですから。向こう行って、真野の御陵でちょっとお礼をしました。

順徳天皇は承久の乱の時に北条義時に負けたんですが、惨めな境遇でしたから、霊界をみると一天万乗の大君というたって、荒れ狂うというような一面もやっぱりまだ残っておったんです。すめらみことの位置に生まれてはおられるんだけど、すめらみことの仏界の中にもいろんな世界がある。地獄、餓鬼、畜生、修羅というようなものがあるんですよ。

法主が平成３年６月に佐渡を訪ねた時の
真野御陵での平田弘之一家との記念写真

我々の社会でも資本家の成金さんになっても、家の中では貧乏人よりもっと苦痛を持っておる面があるのと同じです。少しでも浄化してもらうように祈ってきたんですが、御陵までやっぱり行かされたんですね。

帰りの時には東京の方に回りました。昔、池上宗仲という殿さんの宅地が今は本門寺というお寺になっている。そこで日蓮さんは亡くなっておられる。その入滅された池上の本門寺へも行ってきた。日蓮の亡くなられたという土地にさえ行けばいい。別にそこにお堂があろうとなかろうと、そんなものは問題じゃないんですよ。

その土地にさえ行けば、亡くなられた時の日蓮の霊魂と接触できるんです。現在のお堂の建物が美しくても汚くても、私にはそんなの問題ではない。けれど池上の本門寺に参りましたら、鉄筋コンクリートで昔の木造のお寺の形に建てていて、ほとんど出来ておりました。中も金ぴかに磨いて芸術作品のように出来ていました。けれども、私はそんなものにはさっぱり興味がないんで、本門寺のお寺のあちこちの隅を歩き回ったり鳩と遊んでみたり、また墓場とか石碑の沢山建っておるところをぶらぶら歩いてみたりしました。私はただそれだけのことなんです。

池上の入滅されておる時の日蓮は穏やかでした。あの人のことですから、もう気持ちというものはこの世に、ほぼ残っておりません。日蓮として持って生まれた宿命的なものは、みんな果たされておるんですからね。

法華経と神ながらの関係

私はどこ行っても日蓮に後を頼むと言われる。けれども南無妙法蓮華経一本で、そして一天四海皆帰妙法というような旗を立てるような真似を私はしません。

私は神ながらの法というものを持っているんで、そのようなことはやりません。けれども日蓮と私の関係がどうもおかしいんですよ。後を頼まれる。鎌倉時代の日蓮は完全に終わって役目は済んでおるから、後は頼むということなんですね。

日蓮について今書いておりますけれども、さっぱりペンが進まないというのはそこの問題なんですよ。私は神ながらの宗教として大倭で出ておる。日蓮という人は関東中心として、鎌倉幕府の時代に活躍された人。法華経という仏教の経典の範囲の中において活躍された。それが今の大倭といかなる関係にあるかということ、これが難しいんです。

日蓮の言われた一念三千法門という、いわゆる寿量品（じゅりょうぼん）の文底に沈めておるところの釈尊の本懐とする教えですね。今日までいろんな法華の偉い人がおったけれど、誰もそれを見破っていない。日蓮が初めて開眼（かいげん）した。日蓮が寿量品の底から引っ張り出してきた釈尊の秘めたところの教えを天台の一念三千法門に付け加えて、日蓮が一つのそういうような説き方をしたんですね。

その一念三千法門の日蓮が言わんとするところと、大倭で私が言うところの神ながらの宇宙の大法というものとについて、この間から討論をやっているんです。亡くなった日蓮と現界の話なんですけどもね。日蓮は仏教的哲学知識でもって説明する。私はもう味でもって神ながらの法でいくと、その問題について原稿書いておるところなんです。

※この法話の中でふれている昭和39年12月発行の『大倭新聞』の「一大事の因縁――日蓮をめぐって」の記事は『やわらぎの黙示』（野草社）でも収録されていますので、ぜひ併せて読まれることをおすすめします。

編集部

「神通力如是」の真意をさぐる　第三十五回

大倭教の源流にさかのぼって

今回の「神通力如是」の神語りでは新しい人物が次々に登場します。室町・戦国時代の日蓮宗の僧である日親、法主との深い縁のある源為朝と白縫の3人です。法主と為朝との関係についてのエピソードを編集部の杉本順一さんが思い出して書いてくれたので、現代語訳の後に載せました。

原　文

（昭和16年11月27日の続き）

仝　朝八時半、屋内ニテ。

両手ヲツキ

「宗祖大日蓮、吾ハ日①親ナリ。

御目通リカナヒ日親コノ上モナキ有難ク御姿拝シ奉ル。吾レ歳若ウヨリ師ノ君ヨリ教ヘラレ宗祖大聖人ノ御心ヲツギ参ラセシ不束ナル者ニ候ヘ共、南無妙法蓮華経ト一人デモ世ノ人々ニ教ヘタサニ布教シ参リ候。幾多ノ法難身ニ受ケテモ吾身ニ一ツノ障ナキハ師ノ御房ノ御霊ガ吾身ヲカバイ玉フト存ジ、其度毎ニコノ日親悦ノ涙ニ打暮レ御題目ヲ唱ヘ候。亦タ此ノ世ニ於テ大聖人再ビ世ニ出テ候テ眞ノ妙法世界立直シノ役目、日親オソバニ侍リ吾ガ腕ノツヾク限リオ盡シ申シ奉ル。永年ノ吾ガ思ヒ今日許サレテオ目通ニ参リ奉リマシタ。ア有難キ事哉、嬉シキ事哉。大聖人ノ御健カナ御姿ヲ拝シ日親コノ上モナキ嬉シュ存ジ上ゲ奉リマス。此上ハ何卒法ノ道ヲ説キ聴セラレ、吾等共共君ノ為盡クシマイラセ候」

「日蓮。

オ、ヨク参リシゾ、日親。汝中古世ニ出テテ吾志ヲツギシ事、吾レ汝ノミソバヨリ見テヰタゾ。ヨクゾ説キ聞カセラレタ。不憫ナル者ゾ、幾多ノ法難身ニウケオリシ時、吾レ御霊トナリテ汝ノ側デ加護シテオッタゾヨ。吾レ一ツ眞ノ妙法説カザリシ為、吾弟子ハ子ナリ子ニ重キセメヲ會ハセルハコレ日蓮ノ罪ナリ。許サレヨ日親殿。コノ上ハ汝モ共ニ世界立直シノ役目何卒日蓮ヨリ頼ミ申スゾヨ。

「日親。

ハァ――　有難キオ言葉ノ數々、日親身ニアマルコノ悦ビ、如何ニ迫害来ウトモ、吾ガ一心ニテツラヌキ師ノ御房ノ手助ノ一ツナリトモ致シマスル。デハ今日コノ時オ誓ヒ奉ル。亦ノ日オ目通リ、麗ハシキ御尊顔ヲ拝セシ上有難キオ言葉ノ數々、コノ嬉シキ思ヒ胸ニ収メテ引キ下リマス。コノ上ハ御身ヲ大切ニ君ノ為、國ノ為御自愛ナサレ一日モオ長命ヲオ祈リ奉リマス」

「吾ハ、奇稲田姫。

白縫、日日為②朝ノ功徳ニヨリ汝オ目通リ許ス。物語ハ亦ノ日トシテ今日ハ目通ダケデ下レヨ」

両手ヲツキ。

「オ懐シキ吾君、妾ハ白縫デゴザリマスル。日日ノ題目供養ニヨリ今日奇稲田姫命様ノオ情ニヨリ再ビ吾ガ君ノミソバヘオ目通リ許サレテゴザリマスル。オナツカシュ存ジマスル。命様ノ命ナレバ物語リハ亦ノ日トシテオ暇仕リマス。君ノミ霊ハ世界立直シノ役、妾モソノ一ツトシテ君ニ迫害モテ来ル者アラバ、吾手動カシトゞメヲササム。永ノ思ヒ今日カナヒコンナ嬉シキ事ハゴザヰマセヌ。デハオ暇ヲ、亦日物語リ致シマス。サラバデゴザヰマス」

日聖云ふ。

一、輸孺香の前身なり。

二、三、日聖の前身なり。

註釈

①日親

一四〇七～八八（応永十四～長享二・九・十七）室町・戦国時代の日蓮宗の僧。久遠成院と号する。幕府の弾圧にも屈せず「法華経」の信仰を主張したので、頭から焼け鍋をかむらされたという伝説から「冠鍋日親」として有名。上総国埴谷（現・千葉県山武郡山武町）に生まれ、中山法華経寺（現・市川市）において出家した。やがて「九州の導師」として、肥前国小城郡の光勝寺（現・佐賀県小城郡小城町）に下向したが、その指導方針が本山の意向とあわず、ついに破門された。このため一四三七年（永享九）に上洛し、『折伏正義抄』を著して伝道への決意を語り、『立正治国論』を著して将軍足利義教に直訴を企てたが、四〇年二月に捕らえられて禁獄された。その翌年には恩赦によって出獄し、京都に本法寺を建立して本拠地を固め、全国各地に伝導活動を展開した。しかしその主張が他宗を激しく攻撃するものであったため、いたるところで厳しい迫害を被った。六二年（寛正三）再び幕府に捕らえられたが、翌年には自由の身になり、その後は本法寺を中心とする教団体制の確立に尽力した。この時期の著作に『埴谷抄』『伝燈抄』『本法寺方式』『本法寺縁起』などがある。日親の果敢な伝導活動の目標は、宗祖日蓮が主張する仏法至上主義を行動のなかで受けとめ、発展・深化させることにあった。彼の受難の体験を神秘的にとらえようとする「冠鍋日親」の伝説は、江戸時代に集成された。（平凡社『日本史大事典』による）

②源為朝

鎮西八郎為朝の名は、その強弓のゆえに余りにも名高い。彼の姿を超人的に描く『保元物語』によれば、身のたけは二メートル十センチ余り、左手は右手より十二センチほど長く、そのため、使う弓矢も常人よりはるかに長大で、天才的な射芸の名手であったという。武者二人を鎧ながら射通したり、馬上の鎧武者を鞍の前輪・後輪と共に射貫くなど、『保元物語』における彼の活躍は縦横無尽であり、その存在なくしては、作品の魅力が半減してしまうほどである。しかし、為朝の生涯には不明な点が多い。

生年は、同物語の記述に従えば保延五年（一一三九）となる。為義の八男に当たり、母は江口（現・大阪市淀川区）の遊女で、同腹に弟の為仲がいる。若くして鎮西（九州）に下向、『保元物語』は、彼が余りに傍若無人なので十三歳の時に父が追放したのだと伝える。

為朝の名を世間周知のものとさせたのは、鎮西における濫行であった。彼は豊後国にいて諸国をことごとく侵害、自ら鎮西総追捕使を称したという。父為義はその責を負って、久寿元年（一一五四）十一月に官を解かれたが、なお、彼の濫行はやまず、翌年四月には為朝与力の輩の捕縛を命ずる宣旨が太宰府に下された。それは保元の乱（一一五六）の前年に当たり、為朝はこの時点以降に上京し、保元の乱に参戦したものと思われる。

乱に際しては父や他の多くの兄弟と共に崇徳上皇側に候じ、兄義朝や平清盛と敵対することになるが、『愚管抄』（慈円著）には、為朝が無勢にもかかわらず、兄頼賢と共に、義朝勢を度度追い返したとあり、彼のこの乱での活躍は、『保元物語』におけるほどではなかったにしろ、事実であったと推測される。さらに『吾妻鏡』には、保元の乱に参戦して為朝の矢から危うく逃がれた大庭景能の言として、為朝が比類なき弓矢の名人であったこと、ところが、身体より大きめの弓を持っていたために馬上では的が定まりにくく、自分はそれゆえに命を拾ったことなどが記されている。彼の武勇は衆人の認めるところだったのである。

清盛・義朝勢に敗れた為朝は、父や兄弟が捕らえられて処刑されたのちも、乱後四十五日間にわたって潜伏、近江国坂田（現・滋賀県坂田郡）のあたりで捕縛された。当時の記録によれば、天皇は連行されてきた為朝をひそかにかいま見ているが、それも豪勇のうわさ高い彼を一目見ようとしたものであったろうか。やがて為朝は、伊豆大島へ流罪と決定される。配流の際、弓が引けないようにと肩を抜かれたとも伝わる。

大島での生活も定かではなく、ただ大島出生の子供二人が系図中に見出される。再び『保元物語』の語るところを述べれば、彼はその地の豪族の娘と結婚、様々な悪行を働いたのちに、鬼ヶ島に渡って鬼をも従え、朝廷から派遣された軍勢に一矢を報いて自害したという。時に二十八歳、異文には三十三歳とある。大島の生活は謎に包まれたまま、彼の豪勇を伝える伝承のみがふくらんだのであろう。なお寿永二年（一一八三）に、九州にいた子息が平氏の郎等に討たれている。（新人物往来社『別冊歴史読本―源平人物ものしり百科』による）

現代語訳

11月27日　朝8時半　屋内にて

（両手をつき）

日親　「宗祖日蓮、私は日親です。お会いすることがかない、私日親はこの上もないほどありがたく御姿を拝ませていただきます。私

は年若い時から師であるあなたから教えを受け、宗祖である大聖人の御心を継いでまいりました。いたらぬ者ではありますが、南無妙法蓮華経を一人でも世の中の人々に教えたいと思い布教して参りました。幾多の法難を身に受けても我が身には一つの障害もありませんでしたのは師であるあなた様の御霊が私の身をかばってくださったとわかり、その度ごとに私日親は悦びの涙に打ち暮れて御題目を唱えていました。またこの世（現界）において大聖人が再び世に出てこられて真の妙法世界に立て直されるお役目、日親はお側にいて私の腕の続く限り（あなた様）にお尽くしいたします。

永年の私の思いが今日許されてお会いしに参りました。あ、ありがたいことです。嬉しいことです。大聖人の健かな御姿を拝見し、日親この上もなく嬉しく存じあげます。この上は何卒法の道を説き聞かせいただき、私達共々に天皇のためにお尽くしくださいますように」

日蓮　「お、よく来られた、日親。あなたは室町中期に世に出て私の志を継いだこと、私はあなたの身近から見ていましたよ。ほんとうによく（世の人々に）説き聞かせられました。（あなたは）気の毒な方ですね。

幾多の法難を身に受けておられた時、私は御霊（霊魂）となってあなたの側で加護していましたよ。私が一つ真の妙法を説かなかったために、私の弟子は我が子であるのですが、その子に重い責めを会わせるのは、この日蓮の罪です。許してください日親殿。この上はあなたも共に世界立て直しの役目を果たしてください。

日蓮から頼みましたよ」

日親　「はあ～　ありがたき御言葉の数々、日親身に余るこの悦び、どの様に迫害が来ましても、私は心を一つにして貫き通し、あなた様の手助けの一つでもいたします。では今日のこの時にお誓いいたしまして、またの日にお目にかかります。麗しき、尊き御顔を拝見し、その上ありがたき御言葉の数々をいただき、この嬉しい思いを胸に収めて引き下がります。今後とも御身体を大切にされ、天皇のため、国のため御自愛くださいまして一日でも長生きをされますことをお祈りいたします」

奇稲田姫　「私は奇稲田姫です。

白縫よ、日々の為朝（法主）の功徳によってあなたが（源為朝である法主に）拝謁することを許します。話し語ることはまたの日にして、今は拝謁だけで下がりなさい」

白縫　「おなつかしい私のあなた様。

私は白縫でございます。日々の題目供養により、今日、奇稲田姫命様のお情けによって、またあなた様のお側でお目にかかるのを許されました。奇稲田姫命様の言い付けですので、物語るのはまたの日としまして失礼いたします。あなたの御霊は世界立て直しのお役目、私もその一つとしてあなたに迫害をもたらす者があれば、私の手を動かして（その者の）命を絶ちましょう。永い間の思いが今日かないこんな嬉しいことはございません。では失礼をいたします。またの日にお話をいたします。お別れでございます」

法主と源為朝のこと

源為朝が法主さんの前世の一人であり、今回の「神通力如是」の原文にあるような話を、私がまだ知らなかった頃のことである。

真夏のある夜、瑞光院の茶の間で法主さん、鈴月かあさんと雑談していた時、薄着で座っておられた法主さんが珍しく右肩をしきりにほぐすようにグルグル回しておられたので、「肩もみましょか」と声をかけたところ、「いいや、これワシ（私）の因縁病やねん」と言われた。

法主さんの「因縁病」という言葉、私はピンとこなかった。瑞光院では因縁だの転生だの生まれ変わりだの、こんな言葉も雑談の中では珍しくなかった。そんな中でいつとはなしに、法主さんの前世の一人が源為朝であったことも分かった。

今回の「神通力如是」の原文にも書かれてあったので「因縁病」の意味も良く分かった。

秋田書店発行の雑誌『歴史と旅』平成10年6月号の「特集源平盛衰三十年戦争」の中に「保元・平治の乱」という項目があり、そこに「…為義以下五人の息子は斬罪に処せられた。為朝一人はその武勇を惜しまれ、腕の筋を切った上で伊豆の大島に流された」とある。

この筋を切られたことが、謎の因縁病の元にあったということらしい。（杉本順一）

ご帰幽報告（大東いそさん、森脇聖淳さん）

▼去る2月4日に大東いそさんの娘さん2人が、母親が帰幽されたとのことを報告に来られました。この日はちょうど五十日祭に当たる日でした。大東さんは大倭の各事業所が、かつて経理面でのご指導で大変お世話になった方です。

▼去る1月10日に和歌山県在住の画家・森脇聖淳さんが帰幽されました。森脇さんは矢追鈴月カアさんの甥でもあり、拝殿の正面右に飾られている聖徳太子像の絵の作者でもあります。

あじさい日誌

2月8日　交流の家でFIWCの定例委員会が行われました。

2月9日　午後1時45分から法主奥津城にて法主帰幽祭開始のごあいさつ。午後2時から大倭大本宮拝殿において帰幽祭が行われました。この日は昭和60年ごろの紫陽花邑の記録映像を見ていただきました。

秀逸だったのはソフトボールをする若者に交じって、法主さんが和服姿でバットをふる映像でした。

2月11日　午前11時から大倭会館で矢追家麻呂さんを祭主にお迎えして故岸野春子さんの一年祭が行われました。

2月15日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

2月23日　午後1時20分から大倭神宮において申孝祭が行なわれ、午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が開かれました。この日は昭和38年2月23日の申孝祭についての法話をお聞きしました。

2月25日　午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

3月5日　午後2時ごろ静岡県の松本直之さんが来邑され杉本順一さんと歓談されました。

3月6日　午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

2月25日　第4回新入職員研修会が午前10時30分より開催されました。

2月26日　令和7年度の新卒採用者事前研修会を午前10時30分より開催しました。3名が福利厚生等の説明を受けました。（菅原園）

2月9日　午後から映画鑑賞を行い、実写版の『シティーハンター』を上映しました。昔見ていたなどの声もあり、興味を持って参加してもらいました。「次は何の映画するの？」など楽しみにしてもらっています。

2月14日　バレンタインデーで例年はチョコレートフォンデュなどを行っていましたが、今年はサプライズ的にチョコマフィンと紅茶を出して喜ばれました。（須加宮寮）

2月13日　今年は早くからひな壇を食堂に飾りました。ひな祭りまでの間、食堂に飾り皆さんに見てもらいました。

2月27日　須加宮寮の卓球大会を行いました。予選は事前に行い、大会当日は、準決勝・決勝を行いました。卓球をしない人も応援をして、盛り上がっていました。（長曽根寮）

2月3日（特養）　利用者と職員で一緒にひな祭りの飾りつけをしました。

2月17・20日（デイ）　作品づくりで皆さんにひな人形の置物を作ってもらいました。（茂毛路園）

2月14日　バレンタインデーでおやつの時間に焼き菓子（チョコ）が用意され、女性職員からご入居者に手渡して、最後に記念撮影を行いました。

こぼれずみ

岸野春子さんの一年祭

岸野さんが帰幽されたのは令和6年2月9日でした。毎年2月9日は法主さんの帰幽祭です。同日に彼女の一年祭を行うわけにもいかず、11日の祝日をこの日に当てられ、彼女と親しかった方々によって計画されました。

会場となった大倭会館の大広間にあった少し使いづらい祭典スペースも、棟梁山﨑正知さんによってすっきり調整されたばかりでした。

新しい祭壇で岸野さんの一年祭が始まって間もなく、彼女からの声が聞こえてきました。

「思いもよらぬ祭典と参加の方々、本当に喜んでいます。自分のために皆さんが集まって聖歌を歌ってもらえることなど、霊界にある者としては、現界におられる方々の心無くしては、やってもらえることではない」とのことでした。

霊界という所は、自分の思うようには事を勝手には出来るものではないらしいです。

教長家麻呂さんがお供えされてある品々をていねいにご供養された後には、「たしかに頂きました」とはっきり聞こえてきました。

法主さんに教わった「顕幽不二」の世界の実感でした。（杉本）

こだまことだま

ご無沙汰しております。『おおやまと』2月号興味をもって拝読。

1月末から出張で栃木県佐野市に滞在中で、夏が終わるころまで、こちらにおります。ホテルの1階には秀郷珈琲という喫茶店があり、近くに秀郷公の居城址や墳墓があることから命名されたのだとか。ここの商品、秀郷コーヒーを送りますのでご笑納ください。

邑に遊びに行くのを楽しみにしております。　**加納八郎**

いつも『おおやまと』をお送りいただきありがとうございます。いつも心に残るものがあり感謝しています。

今回はやはり栗原俊雄さんの講演に関る内容が心に残りました。「終らない戦争被害」、これは深い内容ですね。

また、編集後記の岸野さんの「初春や生くること趣味にせむ八十路」も心に響きました。自然体として生きること、それを大切にそれぞれの場と関係の中で生きたいと思っています。

いつも大倭と一緒にいると感じつつ生きています。

加藤彰彦（野本三吉）

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

4月6日（日）　午後2時より大倭神宮にて。

＊須佐緒祭（大倭大本宮）

4月8日（火）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。恒例の園遊会はなくなりました。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐（結び）の緒に感謝をするお祭りです。

＊大倭会主催禊会

4月13日（日）　午後2時より大倭拝殿にて。

＊箭負祭（大倭神宮）

4月15日（火）　午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備（大倭神宮）の霊威を法主日聖大恩師の遠祖（箭負氏）が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。

＊月次祭（大倭大本宮）

4月23日（水）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。